

氏名	あしな さだみち 芦 名 定 道
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学位記番号	論 文 博 第 260 号
学位授与の日付	平 成 6 年 1 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	P. ティリッヒの宗教思想研究

論文調査委員 (主査)
教授 水垣 涉 教授 藺田 坦 教授 長谷 正 當

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、20世紀における最も重要なキリスト教神学者・宗教哲学者の一人であるパウル・ティリッヒ (Paul Tillich, 1886-1965) の宗教思想を全体的に把握しようとするものであり、序論、三部九章の本論及び文献表からなる。

まず序論「ティリッヒ研究の現状と方法」では、広範な問題連関のなかで長期にわたって展開されたティリッヒの思想を「トータルな仕方 で 解明する」ための方法論を見いだすために、1980年代末までのティリッヒ研究が検討される。これに基づいて、論者は、ティリッヒの思想の形成と展開の根底にある実存的経験と思想との関連の解明、思想の発展史的研究、体系の再構成、かれの思想が把握しようとしている事柄の解明、という四つの視点を取り出し、これらを総合することによってはじめてティリッヒの宗教思想の全体像が明確になると主張する。

三つの章からなる第一部「弁証神学・体系構想」では、ティリッヒの思想の基本的立場を「弁証神学」(apologetic theology) と呼ぶことの適切性が確認されたうえで、この神学の方法としての体系構想とその具体化が論じられる。これはティリッヒの弁証神学の形式面の解明といってよい。第1章「ティリッヒの思想の展開と弁証神学」では、ティリッヒが問題意識と方法論のいずれにおいても、キリスト教と近代文化との総合を目指すプロテスタント弁証神学の伝統を継承しつつ、彼自身の実存的な意識と宗教的状況とにおいて独自の具体化を試みたことが明らかにされる。第2章「体系構想とその根拠」は、ティリッヒの体系概念がドイツ観念論における体系理念とそれにたいする実存主義の批判という二つの要素の緊張をはらんだものであること、また神学体系の構成においては、伝統的な三一論的救済史に依拠していることが示される。第3章「二つの相関モデルとその一般化」では、ティリッヒの体系構想から弁証神学の「形式・内実」モデル(神律的体系論の構想)と「問い・答え」モデル(相関の方法)という二つのモデルが取りだされる。そして、これら二つのモデルをさらに一般化された相関モデルへと展開することによって、キリスト教と文化の相互依存性と自律性という二つの条件の両立における「シュライエルマッハーのジレンマ」に対処することが可能であり、また「相関の方法」の一般化もティリッヒの弁証神学自体から正当

化できることが論じられる。

第二部「キリスト・象徴・歴史」は三つの章からなり、ティリッヒの弁証神学の内容の分析を意図する。その要点は、弁証神学の基礎がキリスト論にあり、キリスト論は媒介・相関の原理として機能することによって言語と歴史の二つの方向に展開される、ということにある。第4章「象徴と宗教言語」では、現代思想における象徴論を概観したのち、ティリッヒの象徴論・宗教言語論の形成と発展が思想史的・神学史的背景に照らして詳細に検討される。そのさい1928年の「宗教的象徴」論文のもつ意義が重視され、綿密な分析の対象とされる。さらに『組織神学』からも、象徴論が神学体系内部の諸部門の相互関係の分析を可能にするような要の位置を占めていること、より根本的には、神の超越性と具体性とを動的に関連させる機能をもつ点で、神学の事柄そのものにかかわっていることが指摘される。第4章の後半は、象徴論とキリスト論との関係の考察に当てられる。現代のテキスト解釈学、隠喩論、パラドックス論を導入しながら象徴論をイエスの譬の解釈に実際に適用することによって、象徴論がキリスト論にたいしてもつ関係とその意義とが確認される。第5章「カイロス論と歴史解釈」では、ティリッヒのキリスト論的思惟が歴史思想、とくにカイロス論へと展開していく道筋が辿られる。ここでも、カイロス論の形成と発展のプロセスがその背景（宗教社会主義など）に即して究明される。これに続いて、ティリッヒの歴史思想の発展という視点から、歴史相対主義克服の問題とユートピア思想の問題が検討される。これらの考察から、ティリッヒの歴史思想が第一次世界大戦の経験やナチス政権下のドイツからアメリカへの亡命など、きわめて具体的な問題連関において展開されたことが示される。第6章「相関の方法と神の問題」では、弁証神学の形式と内容との関係が『組織神学』における「神の問題」を詳細に分析することによって具体的に解明される。ティリッヒは、現代の宗教的状况における無意味性に由来する不安の分析から出発して、人間存在における宗教的問いの可能性とその意味を示すことによって神への問いの必然性を解明しようとしており、そこからかれの存在論的神学が成立してくる。この点に関してティリッヒにおける三一論や神論の諸象徴の解釈も検討される。

第三部「宗教と文化」では三つの章にわたって、ティリッヒの宗教論とその現代の宗教研究における意義が究明される。まず第7章「宗教とは何か」では、ティリッヒにおける狭義と広義の宗教概念の区別とその理論的説明、また宗教概念の機能的規定と実体的規定との関係が論じられ、さらに宗教批判と宗教の多元性という現代的な問題がティリッヒの宗教論の範囲で扱われる。第8章「キリスト教神学と宗教批判」では、ティリッヒの思想形成において近代の宗教批判、とくにフォイエルバッハのそれが宗教のデーモン化にたいする批判として積極的に評価されており、これがキリストの十字架の象徴における自己否定性の契機に基礎づけられる、キリスト教における偶像化への根本的批判に通ずる、と考えられていることが説明される。第9章「宗教の神学とキリスト教の未来」では、現代の「宗教の神学」の諸問題にたいするティリッヒの宗教論の関係及び意義が論じられる。かれは、晩年に「宗教の神学」の構想を準備していた。かれのこの観点から宗教一般とキリスト教の未来がいかに見られるかが、宗教論の帰結と展望として考察される。ティリッヒの宗教論の一つの帰結は、諸宗教における偏狭性を克服することが宗教とキリスト教の未来にとって決定的な意義をもつこと、またそのためにもすべての宗教に共通する批判原理を明確にし、デモーニッシュなものとの戦いを継承しなければならないこと、である。

論文審査の結果の要旨

本論文は、20世紀の代表的な神学者・宗教哲学者であるティリッヒの思想の形成と発展を弁証神学のモチーフから分析し、統一的に解釈することを目指している。論者は、ティリッヒの全著作を綿密に読み、1980年代末までの国際的なティリッヒ研究の状況を視野に入れながら、ティリッヒの多面的な思想を一貫した方法で解釈し、説得力に富むティリッヒ研究を提示した。400字原稿用紙に換算して恐らく2000枚にも及ぶであろう本研究には、論者の能力と勤勉、集中力と関心の広さが遺憾なく示されている。

本論文はティリッヒ思想の細部についても多くの新しい解釈を提出しているが、全体として注目すべき成果は次の三つの点である。

1. 論者は、多くの思想との折衝のなかで長期にわたって形成されたティリッヒの思想を「トータルな仕方で解明する」ために、かれの実存的経験と思想との関連、思想の発展、体系の構造、思想の志向する事柄という四つの視点からの考察を統合する方法を提唱し、これを本論文で実際に遂行している。この方法の妥当性と有効性は、本論文の成果から十分確かめられたとあってよい。また論者が主張するように、この方法はキリスト教思想一般にも有効な方法になることが期待される。このような明確な方法論の自覚に基づく本研究は、特定の著作、特定の時期、特定の思想を対象とする従来の個別研究を踏まえつつこれらを統合している。この点でこれまでのティリッヒ研究を大きく前進させたものと評価しうる。

2. ティリッヒの思想の根本に弁証神学的動機があることは、多くの研究者がすでに説いているところであるが、論者はティリッヒ思想の形成と発展の全体にこの動機がはたらいていることを従来の研究よりもさらに広範な連関において明確に論証した。これによってティリッヒの思想が「弁証神学」としてもっともよく把握されることが確認された。これとともに、かれの弁証神学が、単なる護教神学には尽きない、キリスト教思想にとって本質的な意義を有していることも解明された。

3. 論者は、ティリッヒの著作を入念に分析し、著者の意図を把握しようとしている。この手続きに基づいて下される解釈と判断は公平かつ明快であって、それだけでも論者のすぐれた能力を示しているが、論者はティリッヒの祖述と要約にとどまらないで、ティリッヒが目指しながら果たし得なかった事柄に迫ろうとする。たとえば、ティリッヒ以後大きな問題になってきた現代の言語論や宗教論を、かれの立場を批判的に発展させることによってとらえなおそうとしている。これによってティリッヒ思想の現代的意義と可能性とが具体的に示された。本論文にはきわめて多くの詳細な注が付けられているが、そのかなりの部分はこの作業に直接あるいは間接に関係しており、論者の広範な関心と知識とを表すものになっている。また論者が、相関の方法の一般化など、ティリッヒ解釈のみならずキリスト教思想の解釈にたいしても重要な意味をもつであろう新しい考え方を提出していることには、独創性が認められる。

ティリッヒの膨大な著作と、重要なものだけでも相当量のほる研究文献に目を通したうえでティリッヒ思想の全体像を把握しようとする野心的な試みであるだけに、難点も少なくない。ティリッヒ思想の多面性に可能なかぎり対応しようとするあまり、中心的内容的テーマや概念の解釈に不十分な点が残されている。ティリッヒの宗教思想の宗教的たる所以や「デモーニッシュなもの」の概念など、さらに立ち入って論ずべきであった。権成の点から見ると、主として批判的発展を扱っている第三部はやや密度に欠ける。

そのほか訳文の誤りが散見されるとともに誤植が多いことなど、本論文には完成度において惜しまれる点がある。

しかし全体として本論文は、我国におけるこれまでのティリッヒ研究の水準をはるかに抜いているのみならず、国際的な水準に照らしても高度の学問的達成となったと評価する。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認める。平成5年9月7日、調査委員3名が試験を行った結果、合格と認めた。